

第8回流域圏学会総会・学術研究発表会開催報告

齋 幸治*

第8回流域圏学会総会・学術研究会は、2018年10月6日に高知大学物部キャンパスで開催された。例年、同会は慣例的に9月下旬の週末に開催されていたが、会場の年間スケジュールの都合により、翌月の第一週での開催となった。

本年は台風の当たり年となり、例年通りの日程での開催となっていた場合、開催日に台風の直撃に見舞われていたことを考えると、偶然にも10月での開催を計画したことは結果として正解であった。ただし、学会員の構成および年間行事スケジュールを考慮すると、本年のような年度下半期の開始直後の日程より、例年通り9月中の開催がやはり適切であると思われる。今後も、特段の事情がない限り、9月開催を念頭に計画すべきであろう。一方で、台風は前週末のみならず、開催日10月6日の前日にも日本列島への接近が危ぶまれており、当日の同会開催可否について、直前まで実行委員長、事務局、学会長との間で協議が行われていた。私事ながら、同時期に私が参加した別の学会講演会においても、開催期間中に開催場所への台風の直撃が生じ、参加者の安全確保や交通・移動、大会運営について多大な障害が発生したようである。気候変動の影響が叫ばれて久しいが、9～10月においてはこのような自然災害に遭遇する可能性は大いに高まっている。今後の大会運営において、このような状況下での開催可否の判断材料や、参加者への連絡も含めた安全確保等について、とくに運営サイドは確認を十分に行う必要があると思われる。

大会当日、学会総会に14名、学術研究発表会に30名を超える参加があった。学術研究発表会におけるプログラムは、招待講演2件、特別セッション3件、一般講演5件であった。交通上の障害による講演者1名の欠席により、一般講演1題の発表が中止となったが、それ以外は開催要領・タイムスケジュール通り実施された。例年、企画されていたユースセッションおよびポスターセッションについては、今年度応募・申請がなく、午前中に招待講演、正午に総会、午後一般講演および特別セッションが実施された。

特別講演においては、「流域圏生態環境研究の最前線」というテーマのもと、水圏生態環境分野で研究に従事している若手研究者2名をお招きしご講演頂いた。福田信二氏は「水利システムが創出する生態水理環境の高精度モデリング」と題した講演の中で、国内外でのバイオテレメトリーや画像解析による水生生物の行動調査や水理環境調査、さらに機械学習を用いた生物の空間分布モデリング実施事例について紹介した。高橋直巳氏は「速やかに遡上環境を創出する可搬魚道開発への挑戦～一般市民による流域圏の連続性回復を目指して～」の講演の中で、可搬魚道設置に関する数多くの活動とそれを通じた魚道開発・改善経緯について詳細に説明した。いずれの講演も、流域圏学会の設置理念である「日本及び海外の流域圏を対象に、流域圏に内在するあるいは流域圏相互の様々な問題や課題に対して総合的で学際的な調査研究と学民産官連携による実践的な取り組みを展開し、国際的な地域文化づくりを推進する」における重要な分野における情報・話題提供であった。

*高知大学農林海洋科学部 准教授 (〒783-8502 高知県南国市物部乙200)

特別セッションにおいては、「ディープラーニング（深層学習）の流域圏研究への応用」のテーマのもと、3件の講演があった。中根英昭氏から、当セッションの総括講演として、ディープラーニングの流域圏研究への応用にあたっての技術説明および現場への応用のアイデアが示された後、若槻祐貴氏・岡田諒氏から高知県内の流域圏現場（四万十川、物部川）における水理・水文環境解析におけるディープラーニング技術の適用事例の詳細な説明がなされた。TensorFlow（機械学習のソフトウェアライブラリ）が google より開発・公開されて以降、ディープラーニング技術は一般へ広く普及が進んでいる。近年、流域圏学会のみならず、本技術の環境解析分野への応用やその有用性について議論される場が数多く設けられるようになってきた。本学会においても、研究その他学会活動の活発化に向けて、最新の AI 技術の有用性に関わるこのセッションが良い機会となることを期待したい。

一般講演においては、水処理ならびに水文分野を中心とした講演が行われた。排水処理におけるウルトラファインバブル応用技術の検証や、水文分野における最新の解析事例およびモデルの検証といった話題提供がなされ、有意義な議論・意見交換が行われた。

以上のいずれのセッションの内容は、流域圏学会の活動における重要な位置づけにあり、当日時間が足りないほどの活発な意見交換が行われたことは大変喜ばしいことである。最後に、本年度大会委員長の準備不足により、開催要領等の公表が遅れ、各位へのスケジュール調整等にご迷惑をおかけしてしまいましたこと、また講演募集期間が短かったことにより、講演題目数が例年より少なくなったことについて、誌面をお借りしまして、深くお詫び申し上げます。また、準備状況が芳しくない中で、開催・運営までご協力頂きました学会長、事務局、スタッフに厚く御礼申し上げます。